

2021年5月1日

Value Management Innovation

株式会社ブイ・エム・アイ総研

## 「活・人・経・営<sup>®</sup>」コラム第86回

### <新たな視点>

新型コロナウイルスの感染拡大を受け、ゴールデンウィークを軸として3回目の緊急事態宣言が発令されました。対象となる4都府県以外でも感染が拡大しているところが増えていて、厄介なことにこのウィルスはしぶとく変異しながら、地球規模で人類を脅かし続けています。

このコロナ禍で、企業経営は経済的にも直接、間接的にダメージを受けているところが多く、新しい時代を切り拓くためのダイナミズム（力強い活力）を今後企業内にどのように生み出していくべきかが、喫緊の課題となっています。

組織の活性化を担うのは人ですから、未来は自分たちの行動にかかっていることを経営者が真剣に社内発信し、無限の可能性を秘める若い人たちを中心として全社員が革新の意義を見出す時、新しい行動パワーは企業内に自ずと大きく生み出されるでしょう。

革新の糸口は先ず、顧客（市場）と直接接点を持つ現場で生じている変化の兆しを捉えることでしょう。例えば、売上に占める受注品目、数量、納期、支払いサイトなどにシンプルな変化となって表れてきますので、この機会を漫然と見過ごしてしまう（機会損失）と顧客の動向や方針の変化に気付かず、「ゆでガエル現象」に陥る可能性が高くなります。時代を生き抜くためには、今迄よりも広い視野を持ち、柔軟に新たな視点を見出すことが私達に求められています。

### <春秋>

渋沢栄一は若いころ、スエズ運河の開削工事を目撃したという。パリ万博に向かう幕府の使節に随行し、鉄道でスエズの地峡を通るときに世紀の大事業を知ったのである。いま話題の実業界の巨人と、コンテナ船座礁で世界の耳目を集める交通路とが重なり合うわけだ。渋沢がスエズを横断したのは1867年である。民間資金を使った斬新なプロジェクトを見た青年は資本主義と公益に思いを致し、その運河は2年後に完成して人の異動や物流に革命を起こす。渋沢が担った殖産興業も運河の恩恵を大いに受けただろう。歴史は視野を広げるとこんなに面白く、現代にも話がつながる。

— 出典：「日本経済新聞」21/3/29 版より —